

ポスト・ヒューマン時代の政治的想像力、 あるいはアイロニカルな神話

— ダナ・ハラウェイの「サイボーグ宣言」を読む その(1) —

副 島 美由紀

1. バズ・ワード：「サイボーグ宣言」

「われわれはすでにサイボーグである。」という触発的な言明で知られる「サイボーグ宣言」⁽¹⁾は、現在カリフォルニア州立大学サンタクルス校、意識史 (History of Consciousness) 講座の教授であるダナ・ハラウェイ Donna Jeanne Haraway の主要論文である。もともと動物学から出発したハラウェイは、イェール大学で生物学博士号を取得、ジョンズ・ホプキンス大学やハワイ大学ホノルル校で教歴を経た後、現職についている。ポスト・フェミニズム時代を迎えた現在のフェミニズム理論家のひとりではあるが、その関心は遺伝子工学や生物学、霊長類学から労働関係論と多岐にわたっており、特にポスト・ヒューマン時代の生体政治学といったテーマを最近の思索の中心に据えているところから、彼女をミシェル・フーコーの思索を継ぐ思想家の一人と見ることもできるだろう。

1985年に発表されたこの「サイボーグ宣言」は、彼女の膨大な発表論文の中でも特に注目を集め、多くのフェミニストやSF評論家たちによって再読、

(1) Haraway, Donna. "A Manifesto for Cyborgs: Science, Technology, and Socialist Feminism in the 1980s" in Elizabeth Weed, ed, *Coming to Terms: Feminism, Theory, Politics* (New York: Routledge, 1989) ダナ・ハラウェイ「サイボーグ宣言」小谷真理訳、巽孝之編、『サイボーグ・フェミニズム』トレヴィル、1992、以下、ハラウェイ論文(日本語訳)からの引用は、()内の頁数で、また原著からの引用は []内の頁数で本文中に記す。

再録、再版されてきた。特に、サイバーパンクと呼ばれる SF の作品群を読み解くのに恰好の理論として多くの場で言及されており、冒頭にあげた科白は、マン＝マシーン共生系時代の到来を告げる託宣さながらに引用され、その分野では一種^{バズ・ワード}流行語と化した感すらある。

確かにこの論文は、人間／機械、人間／動物といった旧来の境界に対する超越を推進しようとしている点において、ポスト・ヒューマンを標榜する文学作品のレトリカルな戦略に強力な理論的補強を与えうるものである。実際ハラウェイ自身も論文の最後部で、境界侵犯のパターンを豊かに提供してくれる源泉として非白人系の女性作家やアメリカの代表的な女性 SF 作家たちの作品を挙げながら、サイボーグ・フェミニズム⁽²⁾の観点から文学を読む方法を試みている。しかし、この論文は、「1980 年代の科学とテクノロジー、そして社会主義フェミニズムについて」という長い副題が語るように、本来文学理論として発表されたものではない。その初出は 1985 年の『社会主義評論』Socialist Review 誌であり、もともと、1980 年代という時代について、社会主義的／フェミニズム的視点から政治的解釈を加えてほしいという要請のもとに執筆されたものである。よって、サイエンス・フィクションを読むための批評理論という印象を与えがちなこの「サイボーグ宣言」は、本来、現実の社会情勢、つまり、レーガン政権下の政治的現実を参照点にした評論であり、また、社会変革への関わり方に、ハラウェイ自身の言葉に従えば、「矛盾にみちみちた世界においていかに思考と行動を連携させていくかという問題(26) [173]」に取り組むためのひとつの政治的提案なのである。

また、「サイボーグ宣言」は次のように始まっている。

「フェミニズム、社会主義、そして唯物論思想、これら三本柱を信条とするアイロニカルな政治神話を構築すること、それが本論のもくろみである(28)

(2) 「サイボーグ・フェミニズム」とはハラウェイ自身の命名ではなく、「サイボーグ宣言」に触発されたフェミニストや文芸批評家等のネーミングによるものである。

[173]。] ポストモダン以降, フェミニズムであることとアイロニカルであることはほとんど同義に等しい。なぜなら, ^{フィクション}物語を語る人間主体そのものが, すでに一定の歴史的物語の効果にすぎないというポストモダン最大のアイロニーのただなかで, フェミニズムは何にもまして自らのアイデンティティの立脚点に疑問符をつきつけるもの, T・イーグルトンの言葉を借りれば, 自らの足元からカーペットを抜き取る行為を敢行するもの⁽³⁾だからである。したがって『サイボーグ宣言』の言説自体, アイロニーにみちみちている。「信条」「神話構築」といった言葉からしてすでに, 「冒瀆」や「神話解体」と同義なのだ。われわれはこのアイロニーを十分に享受するのでなければ, 「サイボーグ宣言」を通過するわけにはいかない。この宣言は, ただ単に〈文化〉と〈自然〉の対立関係に幕を引き, 人間と機械の共生関係を慶賀しようとするものでは決してないからだ。むしろ, そのような共生関係を可能にするテクノロジーの“物語性”にわれわれの目を向けようとするものなのである。ところが, 特にSF関係の文献に見られる「サイボーグ宣言」の援用は, 時としてこのフェミニズム理論特有のアイロニーを読み落としているように思われる。〈サイボーグ・ポリティクス〉, つまりハラウェイの提唱する政治意識を, 「革新的な代替案としてのテクノロジーとの共生という展望を開いてくれるもの」として認識し, 「実際のところ, この共生関係はすでに獲得されている⁽⁴⁾。」と楽観するならば, われわれは科学とテクノロジーによる社会の集積回路で情報伝達に勤しむことにより, その回路を紡ぎ出す「支配の情報工学」にやすやすと加担してしまいかねない。それこそハラウェイが警告する方向なのである。

「サイボーグ宣言」を単なるSF界のバズ・ワードとして終わらせることな

(3) テリー・イーグルトン『ワルター・ベンヤミン：革命的批評に向けて』勁草書房, 1988, 203頁。

(4) スコット・ブカートマン「ポストヒューマン時代の太陽系」山田和子訳, 『ユリイカ』1993年12月号, 青土社, 60頁。

く、この提案の持つ革新性を真に理解しようとするなら、それが本来 80 年代の現実認識に立脚した政治評論であること、ひとつのフェミニズム理論であること、この二点は決して忘却されてはならない。では、ハラウェイの提唱するサイボーグ・ポリティクスとは、どのような政治学を言うのだろうか。〈サイボーグ〉とは、ハイテク情報化社会が「人間」中心主義の終焉を迎えるにあたって浮上してくるイメージとして、どのような解放の想像力をわれわれに与えてくれるのだろうか。また、それが特に女性の政治意識を変えるとすれば、その極めつけのアイロニーはいかにしてフェミニズムの修辭的戦略たり得るのか。本論はこれらの問いを中心に据えつつ、難解ではあるが多くの示唆に富んだこのハラウェイ論文を、その中心的立脚点に沿って読み直し、その全体像を把握し、それによってサイボーグ・ポリティクスをその可能性の広がりにおいて捉えるための足掛かりを作ってみたい。

2. 境界線解体の 3 つの段階

サイボーグ・ポリティクスが掲げる目標は明解である。それは、いかにして西欧的ロゴスの具象化としての「人間」にならずにすむかを学ぶことである。ハラウェイの言う西欧的ロゴスの伝統とは、人種差別的・男性優位的・資本主義的・進歩主義的であり、つまるところ「文化生産の源泉とうそぶいて自然を搾取する伝統、ひいては他者を再考することで自己再生産する(31) [174]」ものである。またそれは自然／文化、肉体／精神、公的／私的といった様々な二項対立をもつくり出した。「サイボーグ宣言」の目論見は、このような伝統の外部に出て、二項対立に起因する搾取や抑圧や階級やジェンダーのない世界を希求すること、あるいは希求するためのより豊かな想像力を養うことにある。結局それは意識の問題であると同時に「生死を賭けた闘争(29) [174]」でもある、とハラウェイは言う。このような二項対立の克服を志向する視点は、時代が可能にするとともに要請するものでもある。では、そのような要請をもたらす時代として、この 20 世紀後半をハラウェイはどのように捉えているのだろうか。いったいどのような想像力が、二元論的志向に起因

する抑圧の構造から我々を自由にしてくれるのだろうか。サイボーグ・ポリティクスを読み解くにあたり、その立脚点となる時代についてのハラウェイ自身の認識を確認することは不可欠であり、まずこの点から作業を始めてみたい。

*

われわれの世界や身体を横断している様々な境界線は、いまや溶解や融合を起こしつつある。そしてこの境界解体は、科学とテクノロジーがもたらすものであると、ハラウェイは言う。そして、三つの重大な二項対立の解体が現在の時点までに起こっていると語る。第一に人間と動物との間の境界線、第二に有機体と機械、第三に物理的なものと物理的ならざるものとの境界線である。この三つの境界線の揺らぎについて、その背景を概観してみよう。

[a. 人間と動物との境界] 第一の境界解体は、最も古くて馴染みが深い。生物学と進化論とが動物と人間との境界線をほぼ消滅に追いやって以来、この区分を決定的に保証するもの、あるいは必要とするものはもはや何もないと言っていいだろう。生物学や進化論が、やはり科学文化上のイデオロギー空間にすぎないにしても、近代の初頭において、シャム双生児や両性具有者たちが実在する奇形人間として、自然と超自然、医学と法学、狂気と理性、兆候と疾患といった図式に基づく言説によって確立されていた近代的主体を不安に陥れたように、有尾猿^{フリーク}や無尾猿^{エイブ}といった高等哺乳類に対する認識は、20世紀後半産業社会における人間主体でさえ、いかに多様な境界に囲い込まれているかを知らしめてくれる。そして、他の生物との境界の溶解を経た後の「動物性」という概念は、18世紀以降考えられていたように、「人間性」に高められるはずのものでも、管理されて飼い慣らされるべきものでもなく、例えば最近のイルカに関する研究が示すように、あらたな意義と知の空間を獲得するだろうとハラウェイは考えている。

[b. 有機体（動物——人間）と機械との境界] この区分が明確に存在していた時代について、ハラウェイは次のように語る。「二元論の背景が唯物論と観念論の対話を構築し、それが弁証法的効果によって解決されていた時代。

この効果をお好みとあらば精神とか歴史とか呼んでもよい(36) [176]。」彼女によれば、自分自身の主人＝著者たりえないからという、機械を人間から隔てる理由は、単に父権主義者の再生産幻想をパロディー化したものにすぎない。そして一見明解に見えていたこの区分も、20世紀後半になってから大いに揺らぎ始めるのである。サイバネティクスの理論が機械的存在と人間を同一の言語で語ることを可能にし、以降、自然と人工、精神と肉体、機械と生物との間に適用されてきた差異のすべてが、ことごとく曖昧化してしまったのだ。機械と生物はコード化されたテキストとして再構想され、知の分類システムの中に共通の空間を獲得するようになった。人間／動物間の境界の融合と、マンとマシーンとの間のハイフンの発見は、生物学的な意味でも、個人主義の特殊な神話というイデオロギー的な意味でも、「人間」という知の対象に関する思考の規則の再編を余儀なくし、「ポスト・ヒューマン」という概念は、すでにポストモダン時代のパラダイムの一部を成しているとも言えるくらいだ。

しかし、マン＝マシーン共生系のためのあらたな思考規則は、例えば人間のフィジカルな可動性を、コンピューターのサイバネティックな流れに置き換えるといったような機能主義的合理性に合致するだけではない。この境界侵犯は、その他の境界侵犯の行為が持たないような快楽を時として伴い得る。不動の機械的存在という理想に、あるいはその完全性に近づきつつあるという意識である。機械が、充足／完成を求める脳の永遠の夢であるとすれば、そのサイバネティクスの予測可能性に完全に自己を明け渡すことは、理性の放棄や終焉ではなく、むしろ道具的理性、管理者の理性への“奉仕”を意味するのであり、またそこには、究極の自己同一性に近づくことのエクスタシーが存在するのである。

この機械と結ばれることのエクスタシーを最も鮮明に語っているのが、サイバーパンクと呼ばれるSFのムーヴメントである。ウィリアム・ギブスンの『ニュー・ロマンサー』(84年)登場以来、サイバーパンクはSF界のメイン・ストロームをなしているが、その魅力はと言えば、何と云っても電脳空間——^{サイバースペース}

人間の脳をコンピューターに直接接続し、コンピューター・バンクが持つ全データを視覚的に再現するというメディア空間——と呼ばれるサイバネティック時代の象徴的なランドスケープ・ヴィジョンにあると言えるだろう。「視覚情報の曼陀羅」「無色の虚空に広がる、輝く^{ロジック}論理の^{ラティス}格子」等々⁽⁵⁾と表現される^{サイバースペース}電脳空間は、SF 的共感覚仮想空間ではあるが、コンピューター・テクノロジーがヴァーチャル・リアリティを準備しつつあった 80 年代後半、そのイメージは十分に近未来的なリアリティを持っていた。サイバーパンクはジャンルを超えて波及する文化的潮流だと言われたが⁽⁶⁾、実際にはそれは、映画やテレビ、音楽や劇画といった文学以外のカルチャー・シーンで同時発生的に起こっていた個々の現象を全体として概観するような、理論的回路となったと言ったほうがいだろう。

また 80 年代には、生体と交接する機械として、脳に三次元的な音像を認識させる「ホロフォニクス」や、脳内画像を網膜に摘出する「フォスフォトロン」、また「全脳波形成同調賦活装置」としての「シンクロ・エナジヤイザー」等、感覚器官をコントロールするメディアが開発されている。身体にダイレクトに情報をインプットしたり、人間の神経系を情報領域として活用したりすることで、これらの機械は言わば生体自体をメディア化している。いまや、テクノロジーが人間の内部情報に帰還を開始する時代だと言われているのだ。サイバーパンクの作家が言うテクノロジーは、すでに「皮膚の下にはいりこみ、しばしば心の中にまでもぐり込んでいる⁽⁷⁾。」そして、人間／機械という二元論を超えるこのような身体感覚と、その背景にあるメディア・テクノロジーを可能にしているのが、以下に挙げる第三の境界侵犯である。

[c. 物理的なものと物理的ならざるものの境界] これは第二の差異の部分

(5) ウィリアム・ギブスン『ニューロマンサー』黒丸尚訳、早川書房、1987、14 頁。

(6) 山形誠二「時間とテキスト——サイバーパンクの後に」『ユリイカ』1993 年 12 月号、73 頁。

(7) ブルース・スターリング『ミラーシェード』小川隆他訳、早川書房、1988、10 頁。

集合であるが、物質的なものと非物質的なもの、と言い換えてもいいだろう。現代の機械が、金属でもプラスチックでもなく、エレクトロニクスという目に見えない非物質によって決定された構造を持つ、ということを行っているのだ⁽⁸⁾。

我々は、身に纏ったり身近に触れたりする物質が自然素材だったり、金属だったり、あるいは人工素材だったりすることによって微妙に身体感覚を変化させている。同様に、機械の持つ物質性も、それと触れ合う我々の感受性に大きく働きかけているはずである。例えば可塑性を持った素材であるプラスチックの登場によって、初めて物質は明確に記号性や情報性を帯びるようになったと言われている⁽⁹⁾。どのようにでも自由に変化し得る“記憶のない素材”としてデザインをより情報化した形で表現し得ることによって、プラスチックという素材は、生産レベルでの機能や手段としてではなく、消費社会におけるメディアとしての物質の効果を助長していったと言えるだろう。

また、現代の機械はマイクロエレクトロニクスの産物であることによって小型化され、著しく携帯可能になるとともに、しだいに非物質化して目に見えなくなり、情報やメディアによって隠蔽されるようになった。いわゆるメディア・スーツ時代の到来である。メディア・スーツを纏うということは、ウォークマンに代表されるような、小型化され透明化したメディア・テクノロジーに身を包む、あるいはメディア・テクノロジーが作り出す空間に身を置くということである。20世紀前半からのプラスチック・アーキテクチュアに加え、80年代のメディア・アーキテクチュアを備えた都市は、情報化社会以前のそれとははっきり様態を変えた。現代の都市とは、情報、モード、

(8) 「非物質」という言葉は、1985年、パリのポンピドゥ・センターで開催された「非物質展」(フランスの哲学者、ジャン＝フランソワ・リオタールの中心企画による)によって定着した。

(9) 伊藤俊治『生体廃墟論』リプロポート、1986、190頁。

商品、広告、ディスプレイなどによって、そこに住む者に行動規範や価値観を環境として与えるメディア空間なのである。言い換えれば、エレクトロニクス・テクノロジーによって生み出された環境に我々が包囲されているのだ。

このことをハラウェイは次のように語る。この「至るところに存在し、目に見えないほど小さい」現代の機械は、「不遜な成り上がり者の神であり、父なる神の偏在性と精神性をパロディー化してしまう(40) [177]。」例えば映画「黒いオルフェ」(59年)の中で、ユリディスの遺体を探すオルフェは、黄泉の国という神話的空間のかわりに、人の生死を記録した紙の山と遭遇する。現代ならさしずめ人間の死亡データをディスプレイする無数のコンピューター画面を目にするといったところか。そして何よりも、機械の小型化、非物質化と権力との関係が深いことを、ハラウェイは指摘するのである。なにしろ、「書くことと権力、および科学技術は、西欧における文明の起源物語においておたがい旧知の伴侶であった(41) [177]」からである。身体をとりまく素材による人間の身体感覚の変化は、当然「空間」においても起こっている。エレクトロニクスによって支えられたメディア空間は、人間のより多くの感覚に作用するマルチメディアを志向し、メディア・スーツはますますその透明度を増す。より物質性の希薄な空間に放たれた人間の肉体は、空間の新たな解放性と閉塞性を経験する。そして、メディアとのインタラクティブによって我々は自らの肉体性の「出力」を試みるが、この空間の拘束度を測ろうにも、権力の顕現であるところの文字は、いまやマイクロ・チップというページに書かれているのだ。「小さいこと、それはいまや美しいどころではない(41) [178]」のである。

3. C³Iの戦略と支配の情報工学

上記のような境界融合を可能にしている科学とテクノロジーが、現実構造を根本的に変革している、というのがハラウェイの主張である。しかし「サイボーグ宣言」が描写する変革された新たな現実とは、テクノロジーと人間の共生という無限の可能性に満ちた明るい世界などでは決してない。ハラ

ウェイが目にしてきた70年代、80年代のアメリカの現実と、境界解体の動きの背後には、これを前にしては「テーラー的な⁽¹⁰⁾ 科学的経営管理の悪夢さえ、かわいらしいもの化する(30) [174]」ような戦略が存在する。軍事目的のために個人的無意識さえも制御し、資本化してしまいかねないサイバネティクスの政治学、いわゆるシー・キューヴド・アイ=C³I (指揮 command — 管制 control — 通信 communication — 情報 intelligence)である。「このシステム実現に際して、アメリカは1984年に840億ドルという国家予算をつぎこんだ(30) [174]。」ここに存在するのは、その最悪のシナリオが、スター・ウォーズ的なハイテク戦争もしくはすべてを核の灰塵にしてしまう終末であるような、「最大級の境界錯乱領域(42) [178]」なのである。

サイボーグ・ポリティクスとは、このシステムがもたらしかねない最悪のシナリオを避け、この領域特有の危機に打ち勝ってサバイバルするための、政治的想像力の提唱である。では、C³Iが象徴するような高度情報化社会に組み込まれるとはどういうことか、ハラウェイは状況をどう俯瞰しているのか、それをまず検証してみたい。

我々が現在暮らしているのは、有機的な工業社会から、多様な差異の錯綜する情報化社会へ至る時代である。科学やテクノロジーの発達や政治的勢力地図の塗り変えを背景にして世界的社会関係が変質しているように見える。社会の価値観は多様化しているように見えるが、実はそこに新たな搾取・併合・全体化傾向を見てとることもできる。この新たな支配システムのネットワークを、ハラウェイは「支配の情報工学」と呼んでいる。この支配のための諸概念の束は、物質的であると同時に観念的でもある。ハラウェイはその個々の概念をあげて図式化しているので、代表的なものを以下に紹介してみよう。つまり、左項に示された「古き良き階級支配の諸概念」が、右項の、「すなわち支配の情報工学とも呼べるおぞましくも新しいネットワーク群へ移行する(60) [185]」ものと考えられるのである。

(10) フレデリック・ウインスロウ・テーラーは1856年生まれの米国機械技術者。

レプリゼンテーション 表 象	シミュレーション 擬 態
リアリズム	ポストモダニズム
有機体	生体部品
臨床としての生物学	記号としての生物学
生理学	通信工学
優生学	大衆操作
衛生	ストレス管理
有機的分業	人間工学／労働のサイバネティクス
リプロダクション 生殖／再生産	レプリケーション 模 造
協同	コミュニケーション増長
労働	ロボット工学
セックス	遺伝子工学
人間知性	人工知能
白人中心資本主義父権制	支配の情報工学

右項の対象は、もはや自然なものとしてはコード化できない。このため、左項の諸事物にしても、同じく自然主義的なコード化を受け付けなくなっている。ポストモダニズムが人間主体を歴史的物語にしてしまったように、先にあげた三種の境界解体を可能にしたような科学とテクノロジーは、「肉体」も「自然」もやはり歴史的に構成された一種の「テキスト」であることを露呈させた。精神と肉体、動物と人間、有機体と機械、公私、自然と文明、男と女、原始と文明などのもろもろの二元論はすべてイデオロギーの点で疑問符を突きつけられ、テクノロジーによって咀嚼されようとしている。例えば公的／私的、家／職場といった労働管理システムに見られる境界線は、^{エレクトロニック・コテージ}在宅勤務用電腦住宅の出現などによって「ホームワーク・エコノミー」と呼ばれる労働形態が成立すれば、消滅する可能性がある。生殖ももはや私的なこととは見なしえず、あまたある再生産の一例として、その経費も利益もシステム環境に完全に組み込まれ得る。性や性的役割の概念も、自然対象に内在する有機的特質として推定することはもはやできない。「女性」という集団

も、「子供」や「青少年」同様、ひとつの歴史的キャラクターなのである。「それは、科学的言説や社会活動における論争史によって構築された複合カテゴリーにすぎない(45) [179]。」いまや、「女性」や「男性」という種族の記号体系が、この制度的空間が解体しようとしている。下部構造と上部構造、公私、あるいは物質と観念といった境界維持概念が、いまほど脆く思われたときはない、とハラウェイは言う。「「高度資本主義」などという言葉では、もはやこのような歴史的瞬間の構造を表しきれなくなっている。西[・]欧[・]的[・]に[・]い[・]え[・]ば、人[・]間[・]=男[・]性[・]の[・]終[・]焉[・]と[・]い[・]う[・]危[・]機[・]そ[・]の[・]も[・]の[・]が[・]危[・]機[・]に[・]瀕[・]し[・]て[・]い[・]る[・]の[・]だ[・](59) [184]。」危機の危機という言葉でハラウェイが表現しているのは、「人間」を消滅させてしまうような新しい知識の形態——フーコーが予想したような——をも揺るがしかねないほどの強度な融合の可能性と、それを迎える意志である。「生体政治の言説がテクノバブルの言説に席を譲ればいかなる名詞も原初的全体像を保てなくなる(39) [177]」と、彼女は言う。

要するに、今日では、いかなる事物も人間も、我々がこれまでその特質と理解していた枠組みの根底から解体し再統合されるものと考えるのが妥当なのである。有機体はもはや知的対象としては存在せず、いまや生体部品と化したとすら言えるのである。つまり、特殊な情報処理装置へと変貌したのだ。例えば人種について記述するとしよう。人間の多様性にまつわるイデオロギー群は、血液型や知能程度といったパラメーターの周波数に応じて公式化されなければならなくなるだろう。

人間を何かにたとえたとしたら、その他の構成要素やサブシステムと同じく、蓋然的・統計的機能を根本とするシステム・アーキテクチャがいちばんなのだ。いかなる事物も空間も肉体も、内在的に神聖なのではない。むしろすべては部品なのであって、しかるべき規範ないし暗号^{コード}がつくられ共通言語で命令を発信しさえすれば、部品相互が連動するものと前提すべきである。現在世界における交換は、マルクスが徹底分析した資本主義市場の帰結としての世^{ユニヴァーサル・トランスレイション}界^{翻訳}さえ超越しかねない。この

宇宙の事物がすべて感染しかねない病理があるとすれば、それはたんにストレスであり、コミュニケーション不能状態であろう(64) [187]。

今や『臨床医学の死』なる本でも書かれてしかるべき時ではないか、とハラウェイは言う。全宇宙の事物は、科学的に認識可能であるかぎり、管理者のためには通信工学上の問題として、反政府主義者のためにはテキスト理論上の問題として、定式化することができる。西欧的自我はこれまで自身の本質や自身の真実を重視してきたけれども、そのような考え方は、「支配の情報工学」を構成する計算法や知識工学の前では意味をなさない。かつて臨床医の方法論には患者(身体)と治療(器具)が必要だったが、いまの我々には、テキストと通信装置があればよい。「社会を支配するものはもはや医療でも規範でもなく、ネットワークとコミュニケーション再編成、それにストレス管理に尽きている(39) [177]。」

わたしたち我々は物理的にもイデオロギーのうえでも、いまや決して後戻りできない。生体部品のような事物との関連において、我々が考えるべきなのは、その本質的特徴どころか、むしろそれがどのような構想で戦略しているか、どのような境界制約があり、どのように流れ、あるいはどのようなシステム理論に基づいて、ひいては制約緩和にはどれぐらい費用をかけているかといった問題のほうだ(63) [186]。

人間の肉体を再構成するのに欠かせない手段として、ハラウェイは情報伝達技術とバイオテクノロジーの二つを挙げている(66) [187]。そしてその二つは共通の動機から構成されていると彼女は考えている⁽¹¹⁾。つまり、現実世

(11) ハラウェイは、1988年の論文「ポストモダン身体のパイオポリティクス」(山田和子訳、『現代思想』1991年3月号、青土社)において、この共通の利害を「テクノバイオポリティクス」と呼んでいる。

界をすべてコード化の問題に翻訳することである。いいかえれば、それは共通言語の探究なのであり、その言語さえ成立すれば、テクノロジー管理に対するあらゆる抵抗は消え、一切の不均質は解体／再構築され、投資／交換されていく、というのである。情報伝達学における問題は、現実世界はどのように記号的問題に翻訳されるかということであり、その解決は、サイバネティクス的な言語と制御の理論に託され、その技術は電子工学に依存している。多国籍企業、軍事システム、政治的プロセス、労働管理システム、これらは今日、ひとつ残らず電子工学なしではありえない。また、ハラウェイの見るバイオテクノロジーは、人間の生殖＝再生産以上のことに感心を持ち、肉体も含め、生物に関するあらゆる境界に介入してくる。生物学はいまや強力な工学的体系、暗号学、一種の記述法なのである。「情報とはまさに計量可能な要素であり、世界翻訳を可能にし、無制約のテクノロジー効果をもたらす類のものだ(67) [188]。」「支配の情報工学」の真の主人公は情報ネットワークそのものかもしれないのである。

しかし、肉体的境界の解釈を誰が操作するのかを考えてみれば、このネットワークの持つ神話性も見えてくるだろう。情報伝達学と生物学は、ハラウェイの考えによると、要するに自然と技術両面における知的対象を解釈する枠組みであり、神話を作る道具でもあるのだ。道具と神話は互いに互いを構成しあっている。ハラウェイは言う。「知性も肉体も道具も、いまや相互に切り離せないほど親密にからみあっている。日常世界を生産／再生産する多国籍的な現実組織と、文化と幻想を生産／再生産する象徴組織とは、ともにからみあっているように見える(70) [189]。」「サイボーグ・ポリティクスの目的が、ハイテク支配下の社会関係に根を持つ人種・性差・階級を再組織化し、西欧的人間像を解体してサバイバルすることにあることを思えば、「サイボーグ宣言」が扱っているのは科学技術決定論ではないことは明らかだ。その問題は、「文化と幻想を生産／再生産する象徴組織」、むしろ人間関係に依存する歴史体系なのである。

テクノロジーと科学的言説は、ある意味では、流動的な社会的相互作用を

形骸化する,いわば凍結効果として解されよう。しかし同時にテクノロジーと科学的言説は,さまざまな意味を産出する道具,あるいは権力のあらたなる源泉を提供するものとしても把握されるべきである。そして,テクノロジー社会における権力と幸福にはどのような意味があるのか,そうした社会に別の形態はありえないのかという議論を闘わせることも可能になろう。いずれにせよ,「文化と幻想を生産/再生産する象徴組織」と関わるためには,分析と政治活動のための想像力の源泉が必要となるのである。

4. サイボーグ神話の誕生

「支配の情報工学」が統合する世界は,家庭や職場,市場や公共の場など,あらゆる場において,空間と肉体を含めたすべてがほとんど無限・多様に分散し,接続可能となる世界である。はたしていかなる種類の政治学が,支配も抑圧も搾取もないかたちで,階級・人種・性差の本質に根本的な変革をもたらし得るのだろうか。

この新しい政治学を再構築するため,必要と思われる二つの支柱をハラウェイは挙げている。まず科学とテクノロジーの社会関係を主題とする理論と実践を通過することである。加えて不可欠なのは,われわれの想像力を構造化する——例えばセックス,セクシュアリティ,生殖^{リプロダクション}=再生産などに関する——神話体系を考慮に入れることだ。例えば西欧文化の中心たる男根ロゴス中心主義的起源神話は,女性の意識にも植えつけられているばかりか,「実際のテクノロジーに,——バイオ・テクノロジーやマイクロ・エレクトロニクスのように,世界を書くテクノロジー諸分野のなかに——あらかじめ書き込まれている(95) [198]。」不可視であるということは,神話の最も重要な戦略のひとつなのである。

神話に対する最良の武器は,R・バルトが言うように「人工的神話をつくりだすこと⁽¹²⁾」である。新たな神話を生むためには,抑圧のかたちやそれを

(12) ロラン・バルト『神話作用』現代思潮社,1967,178頁。

打破する可能性をいかに想像力たくましく理解するかが条件となる。その想像力は、いかなる起源神話や本質的な自己同一性の物語とも関係を持たず、C³Iの操作の裏をかきつつ境界融合の空間を歩いていくような、個人的でしかも政治的な主体のイメージに焦点を結ぶことになる。そこで、機械と生物のハイブリッドであるサイバネティクス・オーガズム、つまりサイボーグというイメージが説得力をもって浮上してくるのである。サイボーグというのは、ハイテク社会の物質的現実と想像力との結節点である。これら両者が二重の中心をなし、「さまざまな事物を実り豊かに融合していく方途を示唆する点で、それじたいが想像力の泉なのではなかろうか(30) [174]。」とハラウェイは言う。

サイボーグのイメージは、実はピグマリオン神話以来の、^ガ女性としての^イ機械^ノという伝統にのっとっている。ハラウェイは、女性の非存在性、つまり非・人間=男性としての存在性、主体神話における周縁性をアイロニーとして逆手にとり、ポスト・ヒューマン時代の戦略として利用しているのである。いっさいの起源神話を免れたサイボーグ的存在は、原始段階も、零度の地点も、鏡像段階や想像界も経由しない。原罪の意識もなければキリスト教的終末論の脅迫観念からも自由である。口唇期における母子共生のユートピアやエディプス期以後のアポカリプスに発生した性差の裂け目を治癒することもない。ハラウェイによれば、ミシェル・フーコーの生体政治学は、「サイボーグ・ポリティクスという未踏の領域をゆるやかに予告するものだった(31) [174]」ということになる。

サイボーグは^{ポスト・ジェンダー・ワールド}脱性差時代の世界の産物である。サイボーグは^{バイセクシュアリティ}両性愛とも前エディプス神話的共生とも疎外なき労働とも関係がない。ともあれそのように有機的統一を夢見て部分的可能性のいっさいがっさいを見栄えよくまとめあげようとする試みすべてに対し、サイボーグは関係を持たない。サイボーグは西欧的な起源神話をまったく欠いているということもできる。そして、ここにこそ^{ファイナル}究極のアイロニーが潜む。というのも、

サイボーグはまた、西欧において個別化思想が猛威をふるったあとに来る、恐るべき黙示的帰結でもあるからだ。個別化思想の果てには、何者にも依存しない究極の自己が、^ア宇宙空間の人間像が夢想されているからだ(32) [175]。

サイボーグの視点に立つなら、もはや政治学を人間が特権化した抑圧即支配一般の図式に立脚させる必要がない。しかも、機械であるからには、支配の情報工学のサイバネティックな権力網に精通している。サイボーグこそ、西欧的伝統における人間=男性の痕跡を溶解させ、現代の生体政治を構築しながら同時に破壊していくという、二重の任務に耐えうる存在なのである。つまり、通信と情報すなわちCとIを再コード化することによって、指揮と管制すなわちふたつのCのコードを破壊していくという任務である。

その際、サイボーグ・ポリティクスが責務と考えている点が二点ある。不変の統一理論を生産しようとしないうことと、科学とテクノロジーの社会関係に対し責任を負うことである。サイボーグのイメージが示すのは、統一的な全体像などではない。むしろ二元論の迷路から抜け出る道であり、それが自分の肉体と道具についての自らの説明を可能にするのだ。またこれは共通言語を夢想するものでもない。むしろ強力で異教徒的な異言語混淆を、^{アイデンティティ}同一性ではなく^{アフィニティ}親和力を手段とする政治を志向するものなのである。

「支配の情報工学」が世界的に拡大しつつある現在は、ひとつのパースペクティヴからするなら、惑星上にC³I的な統制ネットワークが張りめぐらされた世界である。別のパースペクティヴから見れば、サイボーグ世界が物語るのは、「リアルな社会であり身体であり、そこでの人々は、動物や機械と親族関係を結ぶことも厭わず、人間存在の断片化や立脚点の矛盾さえ恐れぬ(44) [179]。」そこでハラウェイは主張する。

以上の双方のパースペクティヴを得て一挙に状況俯瞰すること、それが政治闘争の名に値する。片方のパースペクティヴだけでは、それによっ

て明らかにされる支配形態と多様な可能性は、もう一方からは想像もできないものになってしまう。一つのヴィジョンが呼び起こす迷妄は、二重のヴィジョンあるいは多頭怪物よりずっと性質が悪い。……現在の状況において抵抗と再融合を試みるなら、これ以上に効き目のある神話は、もはやほとんど望めまい(44) [179]。」

西欧的主体を構造化している境界線が解体されることによって派生する可能性が、フェミニズムにとっての豊穡な資源であるならば、サイボーグ神話とは、解体と再構築をくりかえすポストモダンな集合的・個人的主体のかたちだ。ハラウェイによれば、これこそフェミニストたちがコード化しなければならない主体のありかたなのである。この新たな神話体系が政治言語になるとき、やがて科学とテクノロジーを眺望しつつ「支配の情報工学」に挑戦していくようなひとつ手段が生まれることになるだろう、と、彼女は期待するのである。

*

ハラウェイのサイボーグは、人間的なものと人間的ならざるものの境界の消滅点にあくまでも立ち尽くそうとしている。そこは、足元にカーペットさえ想定しない空間である。しかしそこはまた、ディストピアの核心を通りぬけた後のユートピア、あるいはユートピアの夢想が憩う空間でもあると言えるのではなかろうか。サイボーグ・ポリティクスの特徴は、まさにそのような空間を想像する行為を可能にする点にある。それはテクノロジーの道具的合理性に対するアイロニーと、生体に関するイデオロギーへの闘争心があって始めて可能になる想像力である。それはおそらく、賛成も反対も受け付けないような、ひとつの倫理的立場であると言えるのかもしれない。

フェミニズム的闘争の提唱でもある「サイボーグ宣言」は、当然「支配の情報工学」における女性特有の布置を、サイボーグ的主体のモデルを特定しながら考察している。科学とテクノロジーが現実構造を変革しているのだという主張は、世俗的、経済的な現実をふまえてはじめて裏付けられるという

のがハラウェイの持論だからだ。そのような世俗的・経済的な現実を前にしたとき、サイボーグ・ポリティクスの修辭的戦略はフェミニズム的闘争としてどのような意味をもつのだろうか。「支配の情報工学」と女性との関係を描くのに、ハラウェイは「集積回路上の女性」と「ホームワーク・エコノミー」という二つの概念を持ちだしている。

この二つの概念と、特にフェミニズム的闘争として見た場合のサイボーグ・ポリティクスの戦略については、また稿を改めて考察するつもりである。

Political Imagination or Ironical Myth in the Posthuman World —
A Reading of Donna Haraway's "A Manifesto for Cyborgs" (1) —

Miyuki Soejima

[参考文献]

- * ミシェル・フーコー『臨床医学の誕生』神谷美恵子訳, みすず書房, 1969。
- * —, 『知の考古学』中村雄二郎訳, 河出書房新社, 1970。
- * デヴィッド・ポラッシュ『サイバネティック・フィクション』ペヨトル工房, 1991。
- * 巽孝之『サイバーパンク・アメリカ』勁草書房, 1988。
- * —, 『メタフィクションの謀略』筑摩書房, 1993。
- * 小谷真理『女性状無意識』勁草書房, 1994。
- * 植島啓司・伊藤俊治『ディスコミュニケーション』リプロポート, 1988。
- * 伊藤俊治『20世紀イメージ考古学』朝日新聞社, 1992。
- * 武邑光裕『メディア・エクスタシー』青土社, 1992。
- * 榎本正樹『電子文学論』彩流社, 1993。
- * 布施英利『脳裏一体』白水社, 1993。